

アンジェイ・ヤイシュチック

アレクサンデル・ヤニツキ ー東海道展ー

「マルチメディア広重展」を経て、アレクサンデル・ヤニツキがマンガ博物館で次なる重要な個展を開催した。主題は、日本文化にとって大きな役割をもつ東海道だ。東海道は将軍のお膝元、江戸（現在の東京）と天皇の都であった京都を結ぶ本州に位置する古の時のなくてはならない街道であった。多くの芸術家の作品の主題となってきたが、その中でも安藤広重（1797～1858）の浮世絵木版画の連作「東海道五十三次」は有名である。1980年代、アメリカのアーティストであるウィリアム・ザッカが日本を旅し「東海道五十三次」と題した55枚のセリグラフを制作したが、これを例にとっても東海道が現代でもなお人々を魅了してやまないことがわかるであろう。少々感傷的ともいえるザッカの作品は、広重のオリジナルの作品を基にしているが、その大部分において、桜咲く国といわれる日本の現在の東海道跡の建て込んだ様子や、醜い建物がかなり建ってしまったことを無視しているように思われる。

浮世絵の名作によって不滅となった場所を訪れた素晴らしい旅の成果であるアレクサンデル・ヤニツキの個展のオープニングに向かいながら、彼が太平洋沿いの東海道の宿場町の現在の写真やドキュメンタリーフィルム、またはそれらが20世紀風に表現された風景などを展示するはずがないと私は確信していた。それ以

上のものを見せてくれるはずだと期待していたが、展示を見て私は度肝を抜かれた。表現方法の多様性、そして動かないものである写真や地図にインスピレーションを受けた作品と、マルチメディア作品や時に胸騒ぎを感じさせる音のコントラストは素晴らしかった。これがまさに日本の本質であり、私が記憶していた日本だった。寺院や神社に特有な静寂、伝統、平安、そして喧噪と目まぐるしく動く人に車に新幹線、それが日本なのだ。

広重の55枚の浮世絵は、出発点から53か所の宿場、そして京都への入り口である橋へと順々に、あたかも一本の線を結ぶように、一つ一つの旅路の風景を絵物語風に描いていくが、ヤニツキはこの線的な要素をまったく無視する。ヤニツキは見る者の目に耳に、強烈な刺激で攻撃をかけるのだ。これこそが、東海道を今日旅する者が感じ取る印象全体をありのままに再現できるのである。

ヤニツキは故意にこの時期を選んで旅をした。遠い昔から、美と命のはかなさの象徴である桜の花の咲く季節を選んだのだった。ありがたい旅の道連れは、長年に渡ってクラブで活躍する日本人アーティスト、書道家でもある宮永匡和氏である。「東海道」と銘打った個展には、広重が描き残した宿場の写真は不可欠である。しかし「残像」でヤニツキは、最新の技術を駆使し、現代特有の躍動感を表現するやり方を選んだ。「残像」の55枚のタブレット画面には、アトランダムに選んだヤニツキ自身が写した映像と写真が、グーグルストリートビューの様々な

場所を俯瞰した映像と実に見事にミックスされて映し出されている。

次の展示は壁を埋め尽くすまったく別のタイプの写真だ。「痕跡」と題されたその作品は、とあるお寺で見つかった古い写真を額に収めたものであり、素人が撮影したと説明が加えられている。過去のものとなってしまった、平安と哀愁に満ちた日本がそこにある。

美術館の壁には「パリンプセスト」と題した大きな白黒の、遠目で見ると一見抽象画かと思える作品がかけられている。しかし、プラスチックのその作品に近づいていくとそれは大都會の地図であることに気がつく。前述のインスタレーションのタブレットにあった場所に関連しているものかもしれない。タイトル「パリンプセスト」とは、一度書かれた文面を消して上書きする文書のことである（説明文を消し地図を上書きした）。これ以外にパリンプセストは、酒の飲みすぎで記憶が消えてしまうという意味もあるが、これはヤニツキの意図するところの意味ではないと思う。地図を基底材にするという作品は、以前クラブの国際文化センターで開催されたルーマニアの現代アーティスト、タラ・フォン・ノイドルフの展示でも見たことがあった。タラの作品は政治的色合いが濃いものだったが、マンガ博物館でのヤニツキの個展は政治的な意味を持たない。また手法も異なっている。ヤニツキのこの作品の大部分を覆っている網のような黒い線は、マジェーナ・ノヴァックの「型紙」とタイトルされるシリーズ画を彷彿とさせる。「型紙」

のキャンバスが、一昔前に女性雑誌についてきた手作り用の洋服の型紙なのだ。しかしヤニツキの作品はもっと洗練されており、インスタレーションとして分類されているのも偶然ではなく、それは、絵でもなく写真でもない。これが顕著に表れているのは、大きな画面に映し出されたインタラクティブ作品「パリンセスト2」である。ここでは来場者が自ら動作によって地図の線を変化させることができる仕掛けになっているのだ。自分の動きで地図を変えることができ、皆楽しみながらいい思い出ができるというわけだ。地図の線が流れたり点滅したり移動することで素晴らしい美術的な効果も加わる。さらに動きによって音も変化する。「パリンプセスト1」では地図本来の線とその上に設置されたガラスに描かれた線が重なる。それは観客の見る角度によって変化していく。相互作用インスタレーション「パリンプセスト3」はその一部が相互作用型のインスタレーションであるが、照明が当たった直方体の硝子に網のように見える地図が描かれ、その内側には蒸気が出ておりガラスは常に水滴がついている。

次の空間は、二つの点滅する画面に映るビデオインスタレーションである。その一つ目は「テレビポートレート」であり、相互作用インスタレーションだ。遠くから見ると、画面がただザーザーいつているだけのように見えるが、虫眼鏡で見ると、それが無数のピクセルであり、人物を映した写真で、次々に現れてくるのだとわかる。もう一つの画面は街の様

子をずっと映し出しているガラスのエレベーターの映像である。エレベーターは限りなく各階の境を超えて上っていく。そのわきには禅寺の庭、京都の竜安寺石庭の写真が二枚。両方の写真には石が映っているがその大きさに違いがあり、一枚は岩、もう一枚は石である。

個展全体は、白と黒でまとめられている。これは色が溢れかえっている日本、特に夜の日本と対照をなしている。もしかしたら、来場者をひっきりなしに襲う、彼の作品のもつ強い刺激を和らげるためかもしれない。展示場内の各所は薄暗く、あたかも質を損ねないよう薄暗くなっている浮世絵の展示場にいるようだ。しかし、奇抜な色を使った例外的な作品もある。前述の作品では日本の古い写真のセピア色が、モノクロの雰囲気を醸し出していたが、それと全く対照的なのが「万華鏡」だ。小さな空間に鏡が壁一面に張られており、来場者は、日本の都会の混沌とした光や色、人込み、喧騒に飲み込まれてしまう。万華鏡は日本の伝統的文化であり、2005年にマンガ博物館でワークショップと展示が行われたことがあった。来場者が万華鏡の中に入ったように設定する展示の発想はアートとして既に存在している。同じような作品を4年前にリスボンのベラルド近代美術館で見たことがある。ブラジル、サンパウロのアーティスト、オス・ジェミオスことオターヴォ&グスターヴォ・パンドウフォ兄弟の展覧会であった。その趣旨は、来場者を遊ばせることであり、私の幼年時代の移動遊園地にあったような

「笑いの部屋」と呼ばれたゆがんだ鏡のようなものが展示されていた。

次のインスタレーションは「ブラックガーデン」である。この作品は2012年「メディア・アート・ビエンナーレWRO」に出展されたものだ。黒い人工観葉植物で壁が埋め尽くされており、そこからは興味深い音が来場者に流れてくるというものである。「パリンプセスト2」同様、センサーが来場者の動きを察知して音を発するというものであるが、それは、ヤニツキの娘であるマリアンナ・ヤニツカの作曲した素晴らしい新曲のフレーズが、その人の動きによっていろいろに組み合わせられていくというしくみになっている。ヤニツキにとって、人工観葉植物と来場者のコンタクトは、彼らの動きによって生まれる音楽をも含めて、自然と文化の会話を意味する。

「桜」は2枚の写真がお互いを見つめあっているような展示だが、タイトルの桜の花が、一つは白く、もう一つは黒い。その上に重なっているのが、前述のインスタレーションの線で描かれた地図である。白と黒は、東洋文化の中に深く根差した相反しながらも互いに補い合う陰と陽を表しているのだろう。会場の一番奥にあるのは、白黒の映像「東海道」であり、大きいテレビの画面に旅の様子が映し出されている。

この個展は東海道に関連したさらに大きなイベントの一つを構成するものだった。オープニングは天皇皇后両陛下ご訪問を記念する毎年恒例の記念式典の日2014年7月4日に行われた。この日、ヤニ

ツキが旅で出会った鞠子宿にある丁子屋の第14代当主柴山広行氏も参加してくれた。丁子屋の建物は広重の東海道五十三次の中に描かれている。(20番目の宿場)柴山氏はすりおろした山芋の伝統料理を皆にふるまってくれた。

この個展の閉会イベントは、気軽に誰でも参加できる形式で、直観音楽系のミュージシャンを集めてヤニツキが結成したグループH i Q(ハイク)によるオーディオビジュアルパフォーマンスが行われた。会場では、拡張現実(オーグメンティッド・リアリティ)の技術を駆使したインスタレーションがこの日特別に設置された。タブレット画面のインタラクティブ形式の地図上に、広重の浮世絵の作品が映し出される場所を、来場者が探していくという仕掛けになっている。このインスタレーションは、現実にはもう存在しない場所を探すという意味合いがあるのだ。

このプロジェクトの一つとして見逃すことができないのが、ネットのホームページ <http://www.alekjanicki.eu/> である。これを見れば、個展の主旨が理解でき、東海道を辿って旅した時に撮影したたくさんの白黒写真や個展自体を映した写真を見ることができる。その映像に流れている音楽は、われわれを会場に引き込むような感じがする。このホームページのメニューのひとつ「東海道」では、作品「残像」で展示された、広重が描いた各宿場の現在の写真を見ることができる。メニュー「広重」では広重が紹介されている。そのほか、アレクサンデル・ヤニツキの経歴とH i Qのオーディオビジュアルプロ

ジェクトについても説明されている。

ヤニツキは偉大なアーティストである。1963年クラクフに生まれ、1990年クラクフの美術アカデミーを卒業。すばらしい版画家であり、デザイナーであり、写真家であり、舞台美術家であり、なかなかのマルチメディアインスタレーション作家であり、実験映画も手掛けている。ヤニツキの作品は世界中のギャラリーで展示されてきた。2005年、日本で行われた万博のポーランド館をクシシュトフ・インガルデンと共に制作した。また「ショパン・サット」「墜落したピアノ」「俳句」「痕跡」など、クラクフの街中でも彼の作品を見ることができる。また私が好きな国立科学センターの素晴らしいロゴマークも彼の作品である。

「東海道展」は日本でも展示される予定になっており東京、大阪、京都、静岡を巡回する。「龍野アートプロジェクト2014<流れ>」ですでにその展示品の一部、映像作品「東海道」が上演され、インスタレーション「ブラック・アウト」も展示された。その地図を使ったインタラクティブアート「ブラック・アウト」の音楽は、日本の素晴らしい若手作曲家荻田翔一が作曲した。このコンサートの様子はYou Tubeの <http://youtu.be/KAVgnX7-ILY> および <http://youtu.be/4f7WfxT-00k> で閲覧することができる。この個展がポーランドに戻ってきたときに常設展示する場所がないのが残念だ。日本への旅をマルチメディアで体験したり、ほかのインタラクティブアートを体感できる場所があれば素晴らしいことだろう。

Aleksander Janicki,
Tōkaidō —
Droga
Wschodniego
Morza

Aleksander Janicki przygotował w Muzeum Manggha kolejną, po „Hiroshige multimedialnie”, ważną wystawę – także tym razem poświęconą tematowi odgrywającemu w kulturze Japonii ogromną rolę. Temat ten to droga wschodniego morza, po japońsku Tōkaidō (東海道) – ważny w przeszłości szlak komunikacyjny na wyspie Honsiu, łączący miasto szogunów Edo (obecnie Tokio) z Kioto, będącym siedzibą cesarza. Szlak był tematem prac wielu artystów, w tym słynnego cyklu drzeworytów Andō Hiroshige-go (1797–1858) pt. „Pięćdziesiąt trzy przystanki na Tōkaidō”. Trasa ta nie przestaje fascynować i współczesnych, wystarczy wspomnieć serię pięćdziesięciu pięciu serigrafii amerykańskiego artysty Williama Zachy pt. „Tokaido Journey” powstałych po podróży do Japonii w latach osiemdziesiątych XX wieku. Te nieco cukierkowane prace starają się nawiązywać do oryginalnych drzeworytów Hiroshige-go, ignorując, z małymi wyjątkami, współczesną, intensywną i często brzydką zabudowę tej części Kraju Kwitnącej Wiśni.

» Idąc na wernisaż wystawy Alka Janickiego, będącej pokłosiem jego fascynującej wyprawy do miejsc utrwalaonych przez klasyka japońskiego drzeworytu, wiedziałem, że nie czeka mnie

Aleksander Janicki,
Tōkaidō —
The East
Sea
Road

Aleksander Janicki has prepared another important exhibition for the Manggha Museum, which, like 'Hiroshige multimedialnie' some years ago, also focuses on a subject that plays a huge role in Japan's culture. The subject is the East Sea Road, or Tōkaidō (東海道) – in the past, an important route on Honshu Island, linking the shoguns' city of Edo (now Tokyo) with Kyoto, the seat of the emperor. The highway was the subject of works by many artists, notably the series of woodblock prints by Andō Hiroshige (1797–1858) The Fifty-Three Stations of the Tōkaidō. The route continued to fascinate modern artists, suffice it to mention the series of fifty-five serigraphs by the American William Zachy titled Tokaido Journey, completed after his trip to Japan in the 1980s. These somewhat cutesy images are an attempt to reference the original prints by Hiroshige, ignoring, with minor exceptions, the modern-day densely packed, and often ugly, buildings in this part of the country.

» Going to the opening of Alek Janicki's exhibition, the outcome of his fascinating expedition to places immortalized by the classic artist of the Japanese woodblock print, I knew I wasn't in for a long series of photos or

po prostu długa seria zdjęć czy filmów dokumentujących obecny wygląd dawnych stacji na historycznym szlaku wiodącym wzdłuż wybrzeża Pacyfiku, czy też widoczków odfiltrowanych wptyły XX wieku. Oczekiwałem czegoś więcej, ale i tak wystawa była dla mnie dużym zaskoczeniem. Można podziwiać wielość sposobów ekspresji, a także skonstrastowanie statycznych zdjęć czy prac inspirowanych mapami z multimedialnymi prezentacjami, a także dźwiękami, niejednokrotnie niepokojącymi. To jednak kwintesencja Japonii – takiej jaka tkwi w mojej pamięci. Zarówno tej wyciszonej, tradycyjnej, emanującej spokojem buddyjskich czy szintoistycznych świątyń, jak i tej pełnej gwaru, ruchu ulicznego i superszybkich pociągów.

» Przede wszystkim Alek Janicki zrywa z linearnością obrazkowej opowieści Hiroshige, w której pięćdziesiąt pięć oryginalnych drzeworytów ukiyo-e ilustruje kolejne punkty trasy – miejsce opuszczenia Edo, pięćdziesiąt trzy następujące po sobie stacje shukuba oraz most wprowadzający podróżników do Kioto. Zamiast tego krakowski artysta atakuje widza ogromną ilością bodźców, zarówno wizualnych jak i dźwiękowych, co świetnie oddaje rzeczywiste wrażenia współczesnego podróżnika po tej części Japonii.

» Termin podróży Alka Janickiego nie był wybrany przypadkowo – przypadał na okres kwitnienia wiśni, które od wieków były symbolem piękna i ulotności życia. Nieocenionym towarzyszem wyprawy artysty był od lat związany z Krakowem japoński malarz i kaligraf Masakazu Miyanaga. Oczywiście na wystawie noszącej w tytule nazwę Tōkaidō nie mogło

videos documenting the current appearance of the former stations on the historical road along the Pacific coast, or landscapes filtering out the influence of the 20th century. I expected something more, but the exhibition was still a major surprise to me. You cannot help but admire the multiplicity of the modes of expression, and the way in which static photographs or works inspired by maps are contrasted with multimedia presentations, and also sounds, often disturbing. It is indeed the quintessence of Japan – as I remember it. Both the subdued, traditional Japan, emanating the tranquillity of Buddhist temples or Shinto shrines, and the Japan that is full of noise, busy streets and high-speed trains.

» Above all, Alek Janicki foregoes the linearity of Hiroshige's pictorial story in which fifty-three original ukiyo-e prints illustrate successive locations along the route: the spot where travellers left Edo, the fifty-three consecutive stations (shukuba) and the bridge taking them into Kyoto. Instead, the Krakow artist attacks the viewer with a massive quantity of stimuli, both visual and aural, which superbly conveys the actual impressions of a modern-day traveller in that part of Japan.

» The timing of Alek Janicki's trip was no accident: it coincided with the cherry-blooming season, for centuries the symbol of the beauty and impermanence of life. The artist had an invaluable travelling companion, Masakazu Miyanaga, a Japanese painter and calligrapher who had for years lived and worked in Krakow. Of course, an exhibition with Tōkaidō

zabraknąć fotografii z miejsc związanych ze stacjami, które uwiecznił Hiroshige. Ale ich prezentacja w instalacji „Po-widoki” oddaje dynamikę współczesności i korzysta z najnowszej techniki. Na ekranach 55 tabletów zmieniają się losowo ujęcia filmów i fotografii wykonane przez Alka Janickiego, znakomicie zmiksowane ze zdjęciami z Google Street View przedstawiającymi miejsca z lotu ptaka.

» Dalej podchodzimy do ściany pokrytej wieloma fotografiami o zupełnie innym charakterze. To instalacja pt. „Ślad”, składająca się z oprawionych w ramki starych fotografii, określonych jako „japońska fotografia wernakularna”, znalezionych w jednej ze świątyń na trasie podróży autora wystawy. To Japonia sprzed lat – spokojna i zadumana.

» Na ścianach muzeum wiszą wielkie czarno-białe obrazy z serii Palimpsest, sprawiające z oddali wrażenie abstrakcji. Ale gdy podchodzimy bliżej, widać, że tworzywem są tu mapy mocno zurbanizowanego terenu – wyraźne odniesienie do niektórych zdjęć pojawiających się na tabletach z poprzedniej instalacji. Nazwa instalacji nawiązuje do techniki ponownego użycia materiału piśmiennego po usunięciu oryginalnego tekstu (na prezentowanych mapach usunięto opisy tekstowe). Co prawda palimpsest oznacza także zanik pamięci w wyniku upojenia alkoholowego, ale myślę, że nie to znaczenie było intencją autora. Z pomysłu użycia map jako podobrazia korzysta też na przykład współczesny rumuński artysta Tara von Neudorf, którego prace wystawiało w Krakowie jakiś czas temu Międzynarodowe Centrum Kultury. Ale zamysł

in its title could not omit to show photographs referring to places connected with the stations immortalized by Hiroshige. But their presentation in the installation After-Views conveys the dynamism of modernity and employs state-of-the-art technology. Fifty-five tablet computers display randomly-changing video and still shots taken by Alek Janicki, excellently mixed with Google Street View bird's eye photos of those places.

» Then we walk up to a wall covered with numerous photographs of an entirely different nature. This installation is entitled Track and comprises framed old photographs, described as 'Japanese vernacular photography', found in one of the temples during the artist's trip. This is Japan as it was years ago – tranquil and meditative.

» Hanging on the walls are black-and-white pictures forming the Palimpsest series, which appear to be abstract paintings when viewed from a distance. But when we come closer, we realize that the material they are made of is maps of highly-urbanized areas – a clear reference to some of the photographs displayed on tablets in the preceding installation. The title refers to the technique of reusing a writing surface after removing the original text (textual descriptions are removed from these maps). Actually, the term palimpsest is also used to describe alcohol-induced amnesia but I don't think this is the meaning the artist had in mind. The idea to use maps as the painting surface has also been proposed by the contemporary Rumanian artist Tara von

Tary był mocno polityczny, co nie jest przypadkiem omawianej wystawy w Muzeum Manggha. Inna także była technika. Siatka czarnych linii na znacznej powierzchni prac Alka Janickiego przywodzi mi bardziej na myśl cykl obrazów Marzeny Nowak pt. „Wykroje”, gdzie kanwą prac były wykroje ubrań do samodzielnego szycia, dostępne niegdyś w czasopismach kobiecych. Prace krakowskiego artysty są jednak bardziej wyrefinowane i nieprzypadkowo są skalsyfikowane jako instalacje, a nie po prostu obrazy czy fotografie. Szczególnie widać to w wyświetlanej na dużych ekranach interaktywnej instalacji „Palimpsest II”, gdzie ruchy widza powodują przesuwanie się linii na mapach, co zresztą stanowi okazję do dobrej zabawy i przypomnienia, że ludzka działalność może zmieniać zawartość map. Sam efekt plastyczny z płynącymi i migotającymi liniami czy przesuwaniami się planów mapy jest zresztą znakomity. Do tego dochodzą dźwięki zmieniające się pod wpływem ruchów. W instalacji „Palimpsest I” specjalny efekt uzyskano przez nakładanie się linii oryginalnej mapy i linii nadrukowanych na znajdującej się nad nią szybie. Nakładanie to ulega zmianom w zależności od kierunku patrzenia widza. Instalacja semiaktywna „Palimpsest III”, to natomiast siatka mapy naniesiona na podświetlone, wykonane ze szklanych tafli prostopadłości, w których wnętrzu kłębi się para wodna, a na powierzchni szyb nieustająco skrapla się woda.

» Dwa migające ekrany znajdujące się w kolejnym wnętrzu zawierają instalacje wideo. Pierwsza to „TV-arze. Instalacja semiaktywna”

Neudorf, whose works were exhibited some time ago at the International Cultural Centre in Krakow. But Tara's agenda was highly political, which is not the case with the exhibition at the Manggha Museum; the technique was different as well. The grid of black lines on the large surfaces of Alek Janicki's works brings to mind Marzena Nowak's series of paintings Tailor Patterns using tailor patterns published years ago in women's magazines as their key component. The Krakow artist's works, however, are more sophisticated and it is not accidental that they are classified as installations, and not just pictures or photographs. This is particularly evident in the interactive installation Palimpsest II, displayed on large screens, where the viewer's movements cause the lines on the maps to move as well, which is actually fun and a reminder that people's actions can change the content of maps. The very visual effect produced by the flowing and flickering lines or the shifts of the planes within the map is exquisite. Additionally, the sounds change with every motion. In Palimpsest I, a unique effect is attained by the overlapping of the lines of the original map with lines printed on the glass pane above it. The parameters of this overlapping change with the direction from which the viewer looks at the installation. Palimpsest III is a semi-active installation in which a map grid is imposed on cubes made of glass panes, lit from underneath, with vapour inside and water condensing on the glass surfaces.

– widziana z daleka przypomina „szumiący” monitor, po zbliżeniu zasypuje nas napływającymi tysiącami małych fotograficznych portretów – pikseli, które można obejrzeć dokładnie za pomocą szkła powiększającego. Druga – jest niekończącym się filmem z poruszającej się przeszkłonej windy z widokiem na miasto, zakłócanym przekraczaniem granic kolejnych kondygnacji budynku. Obok dwie fotografie „Kioto – Kamienny Ogród. Ryōan-ji” z widokiem ogrodu Zen. Na obu zdjęciach widać kamienie, ale w innych skalach granulacji – głazu i drobnych kamyczków.

» Prezentowana ekspozycja utrzymana jest w czerni i bieli, stanowiąc kontrast ze współczesną, przekolorowaną, szczególnie nocą, Japonią. Być może intencją twórcy było ograniczenie wielkiej i tak ilości bodźców atakujących widzów z jego instalacji. Półmrok panujący w poszczególnych pomieszczeniach przywodzi też na myśl wystawy oryginalnych drzeworytów ukiyo-e, gdzie oświetlenie musi być ograniczone ze względów konserwatorskich. Ale są i kolorystyczne wyjątki. O ile sepia niektórych starych japońskich fotografii utrzymuje się w monochromatycznych klimatach, to zdecydowanie zrywa z nimi instalacja pt. „Kalejdoskop”. To niewielkie pomieszczenie wyłożone lustrami konfrontuje widza z chaosem światła, kolorów, tłoku i gwaru, tak charakterystycznego dla wielkich japońskich miast. Kalejdoskop to także część tradycyjnej, japońskiej kultury, mająca swoje odzwierciedlenie m.in. w warsztatach i pokazach kalejdoskopów zorganizowanych w Muzeum Manggha w 2005 roku.

» Two flickering screens in the next interior contain video installations. One is called TV-faces. Semi-active installation: viewed from a distance, it resembles a 'static' monitor but up close it floods the eye with thousands of small photographic portraits – pixels to be inspected with a magnifying glass. The other one is endless video footage from a moving glazed lift with a view of the city, disturbed by the passing storeys of the building. Placed next to it are two photographs with a view of a Zen garden, Kyoto: Rock Garden. Ryōan-ji. Both photos show rocks, but at different scales of granulation – a large boulder and very small stones.

» The colour scheme of the exhibit is predominantly black and white, in contrast to today's Japan, excessively colourful, especially at night. Possibly, the artist's intention was to limit the otherwise large quantity of stimuli attacking the viewers of his installations. The dusk pervading the various exhibition rooms also brings to mind displays of original ukiyo-e prints, where the lighting has to be moderated for preservation reasons. But there are colourful exceptions. While the sepia of some of the old Japanese photographs still remains part of the monochromatic scheme, a decisive breakaway from it is the installation entitled Kaleidoscope. A small room lined with mirrors confronts the viewer with a chaos of lights, colours, crowds, and noises, so characteristic of big Japanese cities. The kaleidoscope is also part of the traditional Japanese culture, as

Warto zauważyć, że pomysł kalejdoskopu obserwowanego przez widzów od wewnątrz nie jest w sztuce nowy. Podobne pomieszczenie widziałem cztery lata temu w Berardo Museum of Modern and Contemporary Art w Lizbonie. Ale wtedy zamysł artystyczny braci z brazylijskiego São Paulo: Gustavo i Otávio Pandolfo, używających pseudonimu OSGEMEOS, był inny. Chcieli po prostu zabawić publiczność, na podobnej zasadzie jak robiono to w czasach mego dzieciństwa w zwierciadlanych „gabinach śmiechu” w wędrownych wesołych miasteczkach.

» Kolejna, niezwykła instalacja to „Black Garden” (Czarny ogród), wystawiana już wcześniej na Biennale Sztuki Mediów WRO 2012. To ściana pokryta czarnymi, sztucznymi liśćmi, zza której dochodzą do widza intrygujące dźwięki. Podobnie jak w instalacji „Palimpsest II”, znajdujące się na sali czujniki reagują na ruchy widzów i uruchamiają źródła dźwięków, budując z elementów skomponowanych przez Mariannę Janicką, córkę Alka, nowe i niezwykłe utwory. Jak stwierdził sam artysta, kontakt widzów z imitacją liści i wywołany tym efekt dźwiękowy stanowią ilustrację dyskursu między naturą a kulturą.

» Dwie przylegające do siebie fotografie pt. „Sakura”, to tytułowe kwiaty wiśni, przy czym na jednej z nich płatki kwiatów są białe, a na drugiej – czarne. Na to są nałożone linie mapy nawiązujące do wcześniejszych instalacji. Symbolikę fotografii można odczytywać jako głęboko zakorzenione w kulturze Azji pojęcia yang i yin, dwóch przeciwnych lecz uzupełniających się

reflected e.g. in the workshops and demonstrations held at the Manggha Museum in 2005. Notably, the idea of a kaleidoscope viewed from inside is not new in art. I saw a similar chamber four years ago at the Berardo Museum of Modern and Contemporary Art in Lisbon. But the artistic agenda of the brothers from São Paulo, Brazil: Gustavo and Otávio Pandolfo, using jointly the art name OSGEMEOS, was different. They simply sought to entertain the public, along the lines of the 'funhouses' in travelling funfairs which I remember from my childhood.

» Another unique installation is the Black Garden, exhibited before at the 2012 WRO Media Art Biennale. The viewer is reached by intriguing sounds coming from behind a wall covered with black artificial leaves. Like in Palimpsest II, sensors in the room respond to the viewers' movements and activate the sound sources, using elements composed by Marianna Janicka, Alek's daughter, to build new, extraordinary works. As the artist indicates himself, the viewers' contact with the imitation of leaves and the resultant sound effect illustrate the discourse between nature and culture.

» Two photographs adjacent to each other, titled Sakura, show cherry blossoms, one white, the other black. Imposed on them are maps, a reference to some of the previous installations. The symbolism of the photographs can be deciphered as the concepts deeply rooted in Asian cultures, those of yang and yin, two opposite but comple-

sił, reprezentowanych tu przez biel i czerń. Zamięciem wystawy jest czarno-biały film pt. „Tōkaidō” ilustrujący podróż szlakiem wschodniego morza, wyświetlany na dużym telewizyjnym ekranie.

- » Omawiana wystawa była tylko jednym z elementów większego przedsięwzięcia artystycznego związanego z drogą wschodniego morza. Ważną jego częścią był wernisaż wystawy, który odbył się 4 lipca 2014 roku i był powiązany z tradycyjnym spotkaniem z okazji rocznicy wizyty cesarza Japonii Akihito i cesarzowej Michiko. Jedną z atrakcji spotkania był Chōjiya XIV (właściwie Hiroyuki Shibayama), właściciel Ryokanu Mariko, którego Alek Janicki spotkał w czasie swojej podróży. Ryokan ten został uwieczniony w słynnej serii drzeworytów Hiroshige (stacja nr 20). Chōjiya XIV przygotował dla przybyłych tradycyjną potrawę z tartych japońskich górskich ziemniaków.
- » Mniej oficjalny charakter miał finisaż wystawy, w czasie którego przedstawiono akcję (performance) audio-wizualną w wykonaniu założonej przez Aleksandra Janickiego formacji HIQ, skupiającej muzyków związanych z nurtem muzyki intuicyjnej. Zaprezentowano także instalację opartą na technologii rozszerzonej rzeczywistości (augmented reality). Za pomocą tabletów wirtualnie powiązanych z interaktywnymi mapami, zwiedzający mógł odnaleźć w ich gęszczu fragmenty drzeworytów Hiroshige, które tylko w jednym punkcie w przestrzeni galerii łączyły się na chwilę w pełną kompozycję. Instalacja nawiązywała do poszukiwania miejsc, których w rzeczywistości dawno już nie ma.

mentary forces, here represented by the colours black and white. The final element of the exhibition is a black-and-white film entitled Tōkaidō, illustrating the trip along the East Sea Road, shown on a large television screen.

- » The exhibition was part of a larger artistic project focusing on the East Sea Road. An important part of it was the vernissage of the exhibition held on 4 July 2014, combined with a traditional meeting on the anniversary of the visit of Japanese Emperor Akihito and Empress Michiko. One of the attractions of the meeting was the appearance of Chōjiya XIV (Hiroyuki Shibayama), owner of Ryokan Mariko, whom Alek Janicki had met during his trip. This ryokan (inn) was immortalized in Hiroshige's famous series of prints (Station 20). Chōjiya XIV prepared a traditional Japanese meal of shredded alpine potatoes for the occasion.
- » The finissage of the exhibition was a less official event, featuring an audiovisual performance action by HIQ, a group formed by Aleksander Janicki with musicians involved in intuitive music. There was also an installation based on augmented reality technology. Using tablet computers linked virtually to interactive maps, a viewer could find in their thick texture some fragments of Hiroshige's prints which would form a complete pictorial composition only when viewed from one specific spot within the gallery. The installation was a reference to looking for places that no longer exist.

- » Ważnym elementem całego projektu jest także strona internetowa: <http://www.alekjanicki.eu/>, na której opisano ideę wystawy, a także udostępniono sporo czarno-białych fotografii z podróży drogą wschodniego morza, a także zdjęć samej ekspozycji. Przewodnikiem po wystawie jest ładnie zilustrowany dźwiękowo film. W zakładce Tōkaidō można obejrzeć statyczne fotografie ilustrujące obecny wygląd miejsc będących niegdyś tematem drzeworytów Hiroshige, zaczerpnięte z instalacji „Po-widoki”, a w zakładce Hiroshige – informacje o japońskim artyście. Można także znaleźć życiorys Alka Janickiego oraz informacje o projekcie akcji audiowizualnej HIQ/Haiku.
- » Warto pamiętać, że autor wystawy jest twórcą wybitnym. Urodził się 1963 roku w Krakowie, a w roku 1990 ukończył krakowską Akademię Sztuk Pięknych. Jest znakomitym grafikiem, projektantem, fotografikiem, scenografem oraz autorem niebanalnych instalacji multimedialnych i eksperymentalnych filmów. Jego prace prezentowano w galeriach wielu krajów świata. Był współautorem, wraz z Krzysztofem Ingardenem, Pawilonu Polskiego na Expo 2005 w Japonii. W przestrzeni publicznej Krakowa mogliśmy podziwiać jego instalacje multimedialne, takie jak: „Chopin Sat”, „Upadły fortepian”, „Haiku” czy „Ślad”. Jest autorem znakomitego logo, bliskiego memu sercu Narodowego Centrum Nauki.
- » Wystawa „Tōkaidō – droga wschodniego morza” będzie także prezentowana w Japonii: w Tokio, Kioto, Osace i Shizuoc. Pierwsza część wystawy już gościła w Kraju Wschodzącego

- » An important component of the whole project is the website <http://www.alekjanicki.eu/>, containing a description of the overall idea of the exhibition and providing a large number of black-and-white photographs from the trip along the East Sea Road, as well as photos of the exhibition. There is also a video guide to the exhibition, with a nice soundtrack. The Tōkaidō tag takes you to still shots showing the current appearance of the locations illustrated by Hiroshige's prints, included in the After-Views installation, and the tag Hiroshige provides information about the Japanese artist. You can also find a biographical note of Alek Janicki and info on the audiovisual action project HIQ/Haiku.
- » It is important to remember that the exhibition auteur is a prominent artist. Born in 1963 in Krakow, he graduated from the Academy of Fine Arts in that city in 1990. An outstanding graphic and stage designer, photographer, and artist specializing in multimedia installations and experimental film, he has had his works exhibited in galleries around the world. Together with the architect Krzysztof Ingarden, he designed the Polish Pavilion for Expo 2005 in Japan. Some of his multimedia installations have been displayed in Krakow's public spaces, such as: Chopin SAT, Fallen Piano, Haiku or Track. He has also designed the exquisite logo for the National Science Centre, an institution particularly close to my heart.
- » The exhibition Tōkaidō – The East Sea Road will also be shown in Japan: in Tokyo, Kyoto,

Słońca w ramach międzynarodowego festiwalu Tatsuno Art. Project – Flow 2014. Prezentowano na nim film „Tōkaidō” oraz instalację „Black Out”, w której muzykę do projekcji z interaktywnymi mapami skomponował znakomity kompozytor młodego pokolenia Shoichi Yabuta. Dokumentację z tego koncertu można obejrzeć na You Tube: <http://youtu.be/KAVgnX7-ILY>, <http://youtu.be/4f7WfxT-00k>. Żałuję, że po powrocie wystawy do kraju nie będzie miała swojego stałego miejsca w Krakowie. Jaką atrakcją byłby pawilon, w którym można byłoby współuczestniczyć w multimedialnej podróży po Japonii, a także podziwiać inne interaktywne ekspozycje!

Osaka, and Shizuoka. The first part of the exhibition has visited Japan before, as part of the international Tatsuno Art Project 2014: Flow. The presentation included the film Tōkaidō and the installation BlackOut, in which the music for the projection of interactive maps was composed by a prominent composer of the young generation, Shoichi Yabuta. Footage from that concert can be viewed on You Tube: <http://youtu.be/KAVgnX7-ILY>, <http://youtu.be/4f7WfxT-00k>. I find it regrettable that, upon its return to Poland, the exhibition will not have a permanent venue in Krakow. What an attraction it would be to have a pavilion where you could take part in a multimedia tour of Japan and enjoy interactive exhibits!